

フランス語

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 前 文

今回の大学入試センター試験の「英語」以外の外国語で追・再試験が実施されたのは「フランス語」のみである。平成20年度、22年度に行われて以来久しぶりに実施された。基本的な報告としては本試験の数値を記し、追・再試験の問題については評価委員会でなされた討議に基づいて記載する。

24回目となった平成25年度大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）の「フランス語」は、受験者数151名（前年度142名）、平均得点は100点満点換算で75.29（同65.84）、最高、最低点は、それぞれ100点、19点（同100点、11点）という結果であった。

まず、受験者数に関しては、久しぶりに160人台を確保した平成22年度より9名減少したとはいえ、昨年度は一時減少したものの平成23年度に確保した151人と同数になった。近年では最も減少した平成24年度の142人を僅かながらも上回る数となり、「ドイツ語」を除き、「中国語」（56名）、「韓国語」（29名）、「フランス語」（9名）はそれぞれ受験者が増加した（増加数）。これは、高等学校におけるフランス語履修者の数が多い年と若干少ない年があり、また前年度の難易度によっても多少のぶれは生じるかもしれないが、一概にこの数を持って結論づけるような要素は何も見られない。「フランス語」が今回微増したといっても一昨年度に述べたように、「教育の実態に大きな変化が見られない以上、一時的に増加したこの人数は果たしてこのまま維持されるかどうかは予断を許さない。今回は少し増加したといっても、個別の大学が出題する二次試験に際して、英語以外の外国語での受験はかなり厳しく制限されており、その点が変わらない限り、高等学校におけるフランス語選択者の増加は見込めず、その結果として、センター試験の『フランス語』受験者数が増加することは難しいであろう」と報告書に書いたが、基本的な流れに変わりはないであろう。

次に平均点に関しては、過去5年間の推移は、69.48→67.40→71.19→65.84→75.29である。昨24年度はその前年の23年度よりは5.35点下がりとしたものの19年度の平均点（70.56）のレベルとほぼ同じ結果となった。ところが25年度は前年度よりも9.45点上昇し23年度のレベル（71.19）より更に高い結果になった。この推移から上昇下降を繰り返しながら一定の範囲で平均点の調整が試みられているようにも見えるが、点数的な若干の高低は、母集団の性格を考えると今後も平均点がそれほど大きく変動することはないと思われる。一方、昨年、同様の指摘をしたことであるが、英語の平均点は59.57で、同じように過去5年の推移を見ると、57.51→59.07→61.39→62.07→59.57で、上昇下降を繰り返しながら60点近辺を推移している。問題作成部会が目指している60点により近づいているためなのかそれとも出題形式に変化があったのか現時点では判断し兼ねる。今後の解明が待たれる。ところで、「フランス語」の平均点は常に「英語」より上回っているが、母集団の数・質の違いを考えると、平均点のみで問題の難易度を述べることは適切ではない。英語以外の外国語に果敢に取り組む高校生を取り巻く環境が少しでも改善されることを願う一方で、センター試験における「フランス語」の存在の持つ意味は大きいと言える。

「フランス語」受験者の学習期間は「英語」に比べるとかなり少ない場合がままあり、この状況で学習した生徒の努力を評価すると同時に、出題内容は受験者の実態に即し、適切であったと言える。しかし、フランス語を履修する学校のカリキュラム、授業時数の差が歴然と存在する以上、この評価が全てに当てはまるわけではない。ある学校のレベルではさほど難解でなくても他校のレベルでは解答に苦しむ場合がままあることも事実である。また、経済的事情かあるいは他の事情でフランス語の授業時間数が減少する傾向の中で、受験者の学力の基盤・許容力の推移を見定めて出題することも必要になるであろう。この点について「結び」で述べるがフランス語履修校のカリキュラム再編が進行しており、あと何年かで現状とは大きく変わった様相を呈することは間違いない。

「英語」のリスニング試験に関しては、今年度のリスニング試験のみの平均点は100点満点に換算して62.90点で、筆記試験は前年比では低下しているが、今年度は上昇して以前より高めである。過去5年推移は58.90→48.06→58.78→50.34→49.10→62.90となり、筆記試験同様に、一定の得点範囲に落ち着かせようとしているが、なかなか思うに任せず上昇下降を繰り返しているとも見える。「英語」に対しても筆記試験とリスニング試験の平均点が毎年ほぼ同レベルであることが求められる。

報告の方針

今回の報告は、上記の点を踏まえ、次の3点を分析の中心とする。

- 1) 受験者の実力差を判定できる試験となっていたかどうか。知識があり、深く考えた結果、不正解になってしまうことがないかと、ということの特に関心したい。少ない集団が対象であるだけに、その点に関しては大人数の科目以上に要求が強いと考える。
- 2) 特定の要素に偏らない、総合的な学力を問う問題であったかどうか。
- 3) 高等学校の学習範囲から逸脱しない問題であったか。

2 試験問題の内容・範囲等

「フランス語」の試験問題に関して、平成18年度までは、全体の形式や内容、配点に大きな変化はなかったが、19年度、第6問に大きな変化が見られ、今年度までその流れが継がれている。それまでは第6問、第7問とも長文読解問題で、受験者にとっては緊張が強いられる形式であった。19年度から第6問では、日常生活の身近な状況・場面を、図を用いて提示し、平易な会話を通してその内容を問う形式となった。初年度の受験者からは、変化に戸惑いを感じたとの報告があったが、それ以降もこうした傾向が続くことは十分に予想されたことである。それ以降の年度の受験者の側からは、従来の形式よりも取り組みやすくなったと評価されている。ただし、海外生活の経験を持つ受験者は非常に限られており、内容によっては図の理解が不十分になる可能性がある。高等学校の平常の授業においても、ビジュアル化した資料の提示を随時取り入れていく必要性を認識した。

さて、25年度問Aは「体操の動作に関する説明を読み」開脚、屈伸、後転など様々なポーズを描いた絵①～⑥を見て、動作の説明文と対応する絵を選択する問題である。この出題形式は「フランス語」センター試験では新趣向である。腹ばいになったり、脚をぴんと伸ばしたり、腕を水平に伸ばしたりと従来のフランス語の教科書では見られない動作の表現が使用されていて、ごく身近な

身体の動きをフランス語でどう表現するか問題を読んでいるだけでも興味深かった。フランス語での静的表現から動的表現へと、授業を通して実生活に関わる表現能力を高めていく学習法の必要性が求められる労作であった。また、これは出題側とそれをデザイナーがどこまで上手に表現するかのコラボレーションに係る問題でもある。

問Bは「料理教室の生徒募集案内」が提示されている。話の内容としては「母の日」のプレゼントとしてお嬢さん二人が料理好きなお母さんに料理教室の受講ギフト券を贈る相談である。コース、料理内容、開講曜日と時間、料金が示されている。設問Iは、募集案内と設問の内容が合致するものと六つの選択肢から二つ選ぶ問題である。設問IIは、二人の会話から母親の受講可能な条件に合ったコースを選択する問題である。それぞれのコース別にきちんと特徴を読み分ければ正答にたどり着ける素直で工夫が凝らされた意欲的問題ある。ほほえましい家庭の会話がテーマとなっている。しかし、この話を読んでいると「料理好き」「新レパートリー開拓に意欲的」な母親は専業主婦ではなく「平日は夕方疲れて帰宅する」キャリア・ウーマンであり、時間的制約もままある。普段の夕食の準備は誰がしているのだろうか？「母の日」プレゼントなら普段の母親としての労苦に感謝するようなプレゼントが一般的ではなかろうか？例えばお母さんを食事会に連れて行って慰労するとか。あるいは子供たちだけでいろいろ食材を工夫した料理を作って母親に食べてもらうとか。あるいは母親の欲しがってほしい品物をプレゼントするとか。いろいろあると思う。あるいは、うがった見方をすれば、このお母さんは「料理好き」ではあるがそれほどの「料理人」ではなくて、「料理教室の受講ギフト券」はもっと腕を上げてほしいという二人の娘の密かな願いか？いずれにしても「母の日」プレゼントと「料理教室の受講ギフト券」の組合せは今一つつながらないような気がした。

数年前より（19年度より）唯一の長文読解となった第7問については、テーマは非常に多彩である。一定の語学力を身に付けていても、そのテーマに関するある程度の知識なしには、問題を読みこなしていくことはできない。日頃から、外国語学習の枠を超えて、様々な問題に興味を持って触れておくことが必要であろう。詳細は設問ごとの評価・コメントに譲ろう。

他の問題に関しては形式の変更はなかった。第1問におけるリエゾンに関する問題も複数年出題され、定着したと言える。第3問の発音とつづりを問うこの形式の問題に初めて触れた受験者は、その設定にいささか戸惑いを感じる可能性があるが、事前に過去の問題に触れておけば難なく対処できよう。全体として、特に海外滞在経験を持たない受験者たちが、普通の高等学校の授業を通して学習したフランス語力で十分に対応できる内容であると言える。

第1問 四つの選択肢の中から下線部の発音が他の三つと異なるものを選ぶ問題で、本試験と同様に必ず出題される問題形式である。全体的に言えることだが、追・再試験の方が難易度は上がっており、この発音問題に関しても追・再試験の方が難しくなっている。

問6までの6題については、母音字の発音の出題が2題、子音字の発音が2題、鼻母音について2題と分類できる。出題内容については、基本問題であったと言えるが、語末の子音字の発音を問う設問がなく、不思議に思う。

また、問7は通常リエゾンに関する出題と受け取っていたが、今回は語頭のhの有音か無音かを問う問題であった。リエゾンについての設問がなかったことになるが、どんな意図があったのだろうか。

第2問 成句的表現や動詞を中心とした語の運用に関する設問であり、例年通りの出題である。要求される多義語への取り組みは、元々受験者にとって自明の課題であるとはいいいながら、出題があまりに基本の意味から離れる傾向にならないよう望む。

問1はen plein airにある名詞airが持つ多様な語義を問うものであったが、en plein air自体は平易な慣用表現であり、正答の選択肢も分かりやすい。問6に取り上げられているà force deとfinir parの成句も基本表現であり、意味を把握していれば容易に正答にたどり着ける。

問2は動詞gagner、問4は形容詞sec、と多義語を問題に取り上げ、使用されている語義を問うものであった。

問3はse retenir de + inf.「～しそうになるのを堪える」という表現で、出題文の「～しそうだったがしなかった」の意味を正しく読み取るのはかなり難しい。選択肢についても巧みな工夫があり、大変答えにくい問題であったと思われる。

問5もpasser à autre chose「話題を変える」という表現で難しい。ただ、問題文が勧誘表現を取っている理由で選択肢から正答を見付けやすい面もあり、問題に取り組みながら新しい表現を学ぶ可能性がある良問であった。

第3問 設問の形式としては分かりにくいのが、扱われている派生語や対義語などのレベルは難しいものではなく、過去に出題された問題で練習をしておけば十分対応できる。だが、かつて「受験者にとっては点数の稼ぎ所」と言われた第3問も、近年は得点率が必ずしも高くない傾向があり、センター試験受験者の最近の傾向を示していると言えよう。

問1は名詞の男性形から女性形への変化で、例外的なcopain-copineが取り上げられていて、変化に注意を要する例外変化の中でもややレベルが高い。

問2は動詞とその名詞形を問う基本問題であった。

問3と問7は動詞の活用を問う問題で、envoyerの直説法単純未来形、jeterの直説法現在形が問われた。どちらも基本動詞であり、不規則活用動詞群からはずれるが見落としがちな例外活用を問われたが、学習者が時間をかけて取り組むこの種の設問は歓迎する。

問4は人を表す名詞形を問う基本問題で、空欄の直前がçであるところも正答を導きやすくした。

問5は調味料の名詞とその味を表す形容詞の対応が、一筋縄でいかない変化について解答を求めている興味深い。

問6は形容詞の名詞形を問うもので、派生語を問う基本問題である。

第4問 文中の空所に補充する問題で、文法や語法の理解度を見るものである。例年出題されているもので、文法や語法に関するレベルはいずれも基本的なものである。8問中4問が文法について問う問題で、あとの4問は語法、慣用表現を問う問題だった。

文法問題

問1、問6には、動詞の用法に関する問題で、それぞれどのような形で使用されるべきかを問っている。動詞の学習に関しては意味以上に用法が大事なだけに、受験者は日頃から辞書の例文を確認しておく必要がある。

問4は副詞の比較級を選ぶ、というところを押さえられれば解答は難しくない。

問8のような疑問詞を選ぶ問題は、基本事項として受験者の力を測る良問である。

語法、慣用表現問題

問2はse prendre pourを問う問題で、prendre A pour Bを心得ていても、判断はやや難しい。

問3は「どう思いますか」の表現のバリエーションをとりあげ、使用動詞penserとの関係から疑問詞を選ばせるもので、わかりやすい。

問5は動詞faireを使った「(学問)する」の表現には、部分冠詞を使用する、と答えさせるものであった。スポーツや楽器演奏について表現されることの多い言い回しであり、選択肢も単純であるだけになおさら、他の問題に比べて難しかったのではないだろうか。

問7はsous prétexte deの表現を知っているかどうかの設問で、基本問題であった。

第5問 これも例年出題される対話文の問題である。話し言葉であり表現も多くは易しいものだが、やはり本試験よりは難しい点が見られた。

問5は、最後のBの台詞が容易に理解できない考えさせる問題であった。正解である②の出だしがMais siで、基本的には否定疑問の後の返答で使われるものであるという点でも、正解と見なされにくく、解決にたどり着くのは非常に難しい。想定ストーリーも、Aがした申し出をまずBがかなりきっぱり断ったにもかかわらず、さらにAが譲らず申し出続けたために(それがまたAの善意であるらしく)、その申し出にBが折れるというもので、展開が予想しづらいものであった。

問2は、Tu n'en auras pas besoin?が、基本表現の応用ではあるが、未来時制で使われる場面を思い描けないと難しかっただろう。

同じように問1、問3、問4は、複数の時制をまたいでいるやりとりであるところが若干複雑だが、使用表現は基本的なものであった。

第6問 近年必ず出題されるようになった図や表を用いた読解問題である。文章だけで問題を作るより、どんな図や表を用いるか考慮しなければならないぶん、作問者の苦勞がしのばれる。例年、AとBの二つに分かれており、それぞれ視覚的な絵が使われる。

今年度の追・再試験のAの問題は、体操方法を説明しているフランス語文に対応する絵を選ぶもので、例えば「体育座り」の姿勢はこんな表現になるのか、という発見のある出題であった。ただ、表現が限定され、tendre, tenduが繰り返し使われるなどの偏りが気になる。基本語とはいえ、それを知らない受験者にとっては解答しづらい問題になったことを指摘しておきたい。

Bの問題は、料理教室の案内が読み解く資料として挙げられた。ストーリーについてはやや不自然な展開に驚いたが(別項で詳述)、それを除くと表現は平易で難しくない。

第7問 平成19年度から第6問が図や表を用いた問題になったため、この第7問がセンター試験の中でただ一つの長文読解問題である。内容としても評論的なものが踏襲されている。

今年度の追・再試験の長文だが、「死」について問う普遍的テーマの論説文であった。気楽に取り込めるテーマではないし、どのような論調で結論にいたるのか想定しにくい点でも扱いは容易ではない。だが、取り組まざるを得ない環境で真剣に取り組む文章としては、真理の探求姿勢を教える内容であり、様々な動詞の法・時制を駆使して語られるフランス語を読み解く甲斐のある文章で、共感した。

設問は、文章理解につながるヒントを含む問題（問2〔42〕、問5〔45〕）や、文の要旨に関わる問題（問1〔41〕、問4〔44〕）があり、問いに答えながら理解を深めることになろう。問3〔43〕は、四つある選択肢のうち正答④tragiqueが他の三つの選択肢と比べて傾向が異なることから、正答を導けるという点があったかもしれない。その場合はそのことから内容理解を助けられる、という面もあり、ある意味好ましいが、試験の特性から見ると選択肢決定に際してより慎重さが必要であったといえる。

第7問 全体的には、本試験と比べて、やはり難しい傾向にあった。

第8問 これも例年出題されている問題で、設問の日本語に対応するフランス語を、選択肢の語句を用いて組み立てるもので、ジャンルのには仏作文に相当する。日本語とフランス語の構造や発想の違いを十分に理解していないと正解に至らない場合も少なくない。従来は設問の日本語を十分に咀嚼して構文を組み替える必要のある問題も多く、ときに日本語とフランス語とが大きく乖離していることがあるという心構えで取り組みたい。

問1はmettreの「時間をかける」表現が問われた。

問2はgênerの否定形と、間接目的語のvousの関わりが正答への鍵となる。

問3は文の終わりが示されていない点で、大きく難易度を高めた。他の設問や本試験では、出題文の始まりと終わりのフランス語が示される形式での設問である。出題の表現の平易さとはともかく、出題の形式はそろっていることが望ましい。

問4は提示の出だしに続くde + inf. がやや難しかった。

問5は、問題作成に当たり出題の日本語をどの程度の“日本語らしさ”に落ち着かせるか、フランス語文との乖離を踏まえて深慮したと聞いた。学習者にとっては、挨拶表現などの決まり文句が、母語における何にあたるのか理解の深さが問われるものであった。どんな外国語学習にもつきまとうハードルであるが、出題文は身に付けたい基本表現である。

3 結 び

文部科学省が平成22年1月に発表した「英語以外の外国語の開設について」の調査結果は以下のとおり。

英語以外の外国語を開設する高等学校等は延べ2,027校（公立1,455校、私立572校）〈平成19年5月1日現在2,042校（公立1,403校、私立639校）〉で開設言語数は16言語。

主な言語としては、中国語が最も多く831校〈平成19年5月1日現在819校。以下同じ〉、で履修者数は19,751人となっている。次いでフランス語373校（393校）8,954人、韓国・朝鮮語420校（426校）8,448人、スペイン語143校（135校）2,763人の順となっている。なお、開設学校数は、平成19年5月1日現在と比べると0.7%減少した。（文部科学省ホームページより）

以前この結びの箇所でも文部科学省の発表について「英語以外の外国語の開設校と履修者」について概要を紹介した。その後新たな統計が発表されていないので、現在入手できる資料としては他にない。今回はもう少し詳細に見てみたい。

資料1 平成22年1月発表

	学校数	外国語数	中国語	フランス語	韓国・朝鮮語	スペイン語	その他	計(延べ)
公立	540校	15言語	11,894人	4,294人	5,933人	1,923人	2,136人	26,180人
			639校	207校	340校	109校	160校	1,455校
私立	189校	13言語	7,857人	4,660人	2,515人	840人	1,766人	17,638人
			192校	166校	80校	34校	100校	572校
計	729校	16言語	19,751人	8,954人	8,448人	2,763人	3,902人	43,818人
			831校	373校	420校	143校	260校	2,027校

資料2 平成21年6月1日現在 履修者数と開設校数

1. 中国語	19,751人 (831校)
2. フランス語	8,954人 (373校)
3. 韓国・朝鮮語	8,448人 (420校)
4. スペイン語	2,763人 (143校)
5. その他	3,902人 (260校)
計	43,818人 (2,027校) 公立1,455、私立572

資料3 平成19年5月1日現在 開設校数

1. 中国語	819校
2. フランス語	393校
3. 韓国・朝鮮語	426校
4. スペイン語	135校
5. その他	269校
計	2,042校 公立1,403、私立639

資料4 センター試験受験者数

	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度
ドイツ語	106	124	132	125	123
フランス語	149	165	151	142	151
中国語	409	364	392	389	445
韓国・朝鮮語	136	167	163	151	180

直近の資料がないために文部科学省の発表(資料1)に基づきその他の資料をまとめてみた。これらの資料によると中国語は僅か2年間に開設校が12校増加。それとは反対にフランス語は20校減少している。この現象は改めて述べるまでもなく現在の国際情勢、国力・経済力の力関係の反映である。フランス語開設校は資料2、3を比較すると分かるが公立校では52校増加しているが私立校では67校減少している。公立校では高等学校学習指導要領の改訂に伴う国際化に対応できる国際教育、コミュニケーション能力開発重視のカリキュラムが生まれ、国際高校、総合高校などでフランス語を第二外国語として選択可能になってきた。その反面、私立高校では英語偏重の傾向と同時に使用教室数に制限があったり、開講経費がかさんで経営上負担になり縮小したりする傾向がある。特にこの弊害は日本のフランス語教育のパイオニア的な存在として知られている幾つかのミッションスクールで顕著な衰退として表れている。その結果、今後フランス語がセンター試験の

外国語として残り得るためには多くのハードルがある。この問題は後述する。

資料5 過去5年間の外国語の平均点

	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	5年間の平均
英語	115.02	118.14	122.78	124.15	119.15	119.84
ドイツ語	153.54	150.12	142.17	144.10	151.54	148.29
フランス語	138.97	134.81	142.38	131.68	150.58	139.68
中国語	137.57	138.03	134.14	154.08	159.27	144.61
韓国語	167.76	149.97	149.89	146.36	140.29	150.85

平成25年度の「フランス語」試験は「ドイツ語」の点数とほぼ等しい150.58となったが、果たしてこれは今回の「フランス語」の問題の難易度が下がった結果だと簡単に結論付けることができるのだろうか。過去5年間の外国語の平均点を見ると分かるが、「英語」以外の外国語の中で今回一番点数の低かった「韓国語」(140.29)の平均点は150.85であり、昨年度より14.92上昇した「フランス語」の5年間の平均点は「英語」以外の外国語の中では最も低い139.68である。これは年度により受験者の層の違いや、問題の難易度の差によって上昇下降するはまもあるとしても、それ以外の要因も考えられる。

今回の「フランス語」の問題は決して例年に比べ易しかったのではない。これまでの問題作成部会と高等学校側との会合の中で長年にわたって討論が積み上げられた結果、可能な限り現状に即した出題形式、範囲、語彙数などの要望事項を吟味、検討していただき徐々に出題反映されてきたと考えられる。これは高等学校側として本当に歓迎すべき出来事である。長年の願いがやっと形になって反映されてきたと言っているだろうか。既に述べたように過去5年間の平均点から判断して決してインフレになったのではない。むしろ一定の制約がかかった規定形式の問題作成から現状を踏まえた現実的な作題に向かって一步を踏み出したのではなかろうか。是非ともこの方針を維持していただきたい。これまでセンター試験に御尽力いただいた多くの先生方のおかげで、第1問から第8問までの出題形式が定着し、それぞれの問題の出題の方法も推敲すいこうが重ねられ受験者に分かりやすく、実生活の様々な場面での応用が求められる生の問題も増え、かつ哲学的な要素も含んだ良問がますます増えていくことを希望する。更に多くの「フランス語」受験者が増加することを期待する。

最後に、現在フランス語を第一外国語として履修し、フランス語で大学受験を目指す中学・高等学校におけるカリキュラムの再編について再度報告しておかなければならない。

現在、世界の国際化が叫ばれ次世代の子供の教育の多様化が進み、画一的な教育から多様性のある教育が提唱されている。小学校から英語教育の義務化が始まっている。しかし、中学・高校の現場では社会・経済状況、効率、経営的観点などからドイツ語、フランス語など英語以外の外国語を教えてきた学校（特に第一外国語として履修可能な学校）で大きな変化が見られる。例えば、明治以来日本のフランス語教育を担ってきたといっても過言でない男子校では、従来中学1年で第一外国語を英語・フランス語のいずれかを選択し、1外6時間2外2時間合計8時間を中学3年間毎年履修し、高等学校でさらに英仏同じ時間数で学ぶシステムであった。しかし、学校の方針で中学入学時の語学選択は廃止され、全員英語6時間、フランス語2時間を中学3年間続け、高1進学時に第一外国語を英語、フランス語いずれかを選択し従来の高校での時間数で授業を行いそれぞれの履

修科目で大学受験を目指すシステムに変わった。また更に付け加えておかなければならない事態が発生した。今度は日本のフランス語教育を支えその牽引力ともなった女子校では平成25年4月よりカリキュラム再編がなされ、フランス語履修は中学3年間で各学年1時間のみの学習となり、高1で第一外国語としての選択となる。この男子校、女子校のカリキュラム変更は第一外国語としてのフランス語の在り方、さらに敷衍して言えばセンター試験の在り方にも影響を及ぼすのは必至である。これにはいろいろの事情があり、フランス語での大学受験ができない大学が多く、理科系、特に医学・歯学部を目指す生徒には厳しい現実がある。この点はすでに何度も繰り返し繰り返しフランス語受験の窓口を広げていただきたいと要望しているが、それぞれの持ち場でも事情があるので、厳しい現状である。ただ、朗報としてはセンター受験の「フランス語」の得点を持ち点として2次試験では語学を課さない大学が幾つか出てきている。もっともこの動きが広がっていくことを希望する。

少し横道にそれたが、フランス語1外選択の新システムの話に戻ろう。今話題になっている学校の新カリキュラムでは現在中1、中2、中3に適応された。今年度からは中学全て英語6時間フランス語2時間履修の学校になった。つまり、25年度入学の高1がセンター試験を受ける28年度入試から、従来の出題の目安にしていた学習項目がそのまま利用できず新たな目安、基準を設ける必要が生まれることを付言しておかなければならない。また更に、この男子校と同様に3年後には日本のフランス語教育を担ってきた女子校も同じ事態が起きる。

この新カリキュラムが行き渡るところには大学入試センター試験の「フランス語」問題作成に大きく影響してくることが想定される。まず、高校での1外選択者が激減すればセンター試験を受験する受験者は公立の総合高校や公立・私立で2外を受講してセンターにチャレンジしてみようとする受験者が大半を占めるようになる。ただし、その数は今より増えているか、減っているか。先は読めない。

これまで機会あるごとに、フランス語教育に関わる方々に中高での現場の実情を報告し、更なるフランス語教育の発展を願ういろいろな要望、要請、歎願を述べてきた。その都度フランス語教育にかかわる方々はフランス語教育の発展と振興に御尽力いただき、このセンター試験の問題にしても膨大な時間を割き心を砕いていただいていた。衷心より感謝申し上げるとともに、更なる進展を目指して御尽力をお願いする。